# ■研究調査レビュー

## 闘牛をめぐる情報発信とネットワーク形成

尾崎　孝宏・桑原　季雄・西村　明（鹿児島大学法文学部）

### 1. はじめに

筆者らは、「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」という研究プロジェクト（以下､闘牛プロジェクト）を現在進行している｡これは従来､個別地点・個別地域社会内部の問題としてのみ捉えられていた闘牛という文化イベントを、広域的な社会的ネットワークという視点から捉えなおそうとする試みである。例えば、徳之島の闘牛は日本全国に知られている。現在、徳之島の闘牛牛は八重山など外部から導入され、また闘牛牛・牛主・勢子が徳之島と沖縄の間を頻繁に往復する事例が散見されるなど、一つの島の地理的範囲をはるかに超えた広域的な社会的ネットワークの存在抜きには徳之島の闘牛は存立し得ないのが現状である。

しかし、徳之島に限らず日本各地の闘牛に関する従来の研究スタンスは、誤解を恐れずにあえて書けば、「地域の伝統文化としての闘牛を支える、共同体内部の閉じた論理」のみを抽出する試みに終始していたといえよう。もちろん、こうした研究にも一定の意味があるのだが、闘牛に関する限り、現在すでに「閉じた地域共同体」という場の設定自体に無理があるにもかかわらず、従来型の視点のみに拘泥することはやはり問題である。

こうした問題意識を背景として、筆者らは闘牛をめぐる広域的な社会的ネットワークの調査を開始したのだが、調査中に目についたのが、小論で取り上げる情報発信の問題である。無論、社会的ネットワークは不特定多数の人々を意識しない対面的情況からも形成しうるものであるし、現存する社会的ネットワークも、牛や人などの具体的な「モノ」の移動に伴って発生したと解釈しうる事例のほうが多いと想像される。しかし、そうした点を考慮に入れつつも、現在の情報化社会と呼ばれる情況を考慮に入れれば、「情報」の移動が形成させうるネットワークの可能性について検討しないのは片手落ちと言わざるを得ない。

情報は、具体的なモノと比較すれば質量が小さく複写が容易であるという意味で、不特定多数の人々を意識した自覚的な流通の発生が容易である。つまりこうした行為が情報発信に他ならないのであるが、現在の代表的な情報発信の形態には、1)具体的な空間と結びついた図書館・博物館などの施設と、2)擬似的な空間であるインターネットを媒介とするウェブページが挙げられる。

小論では、闘牛プロジェクトの一環として調査を行った対象の中から、広く闘牛に関わる情報発信媒体として岩手県奥州市（旧前沢町）の「牛の博物館」への訪問記とウェブ上における闘牛情報の発信について取り上げ、その現状と課題、さらにはこうした情報発信からのネットワーク形成の可能性について展望したい。

### 2. 岩手県奥州市「牛の博物館」訪問記

#### 2ー1. 奥州市前沢区

沖縄や徳之島などの闘牛開催地で、闘牛として飼われている牛は、その生産地をたどると八重山や隠岐、新潟などのほかに、遠く岩手県から買い求められてきたものもあるという。岩手といえば大型の赤牛、南部牛で知られるが、岩手県で闘牛が行われているという話は聞かない。岩手はもっぱら牛の生産地、

とりわけ肉牛の生産出荷地としてその評判を確立しているが、現在、闘牛とはどのように結びついているのであろうか。そのような疑問を持ちつつ、前沢町に「牛の博物館」というのがあることを知り、南部牛と闘牛との関係の手がかりを求めて、今年3月21日に、この博物館を訪れた。我々3人が牛の博物館を訪れたとき、前沢町はちょうど2006（平成18)年2月20日に水沢市や江刺市など他の4市町村と合併して奥州市前沢区になったばかりであった。北海道に次いで全国で2番目に大きな岩手県の内陸南部に位置する奥州市は、北は北上市や花巻市、南は一関市や平泉町、東は遠野市、西は秋田県と隣接し、東西57 km、南北37 km、総面積993㎢と、奄美大島(712㎢)よりもさらに広大な地域である。

旧前沢町は、東に北上山系、西に東北のアルプス奥羽山系がつらなる北上平野の一角を占めており、人口約16,000人、東西14 km、南北9 km、面積72㎢のこじんまりとした町だった。町のほぼ中央を東北一の大河北上川が南に流れ、その両側に拓けた広大な水田は戦前から東北屈指の穀倉地帯として知られる。また、昔から自給肥料や農耕・搬送用として飼育されていた牛が、耕運機の導入により、繁殖と肉用肥育牛に転換され、その際、種牛として兵庫牛を、また、繁殖牛に島根牛がそれぞれ導入された。この配合によって生まれた「和人」という牛は、前沢牛の名の評価を高めていくのに大変活躍したという。
生産者たちは、「牛にストレスを与えない快適な環境」を作るために、畜舎の風通しをよくし、牛舎の隅々まで清潔に保つよう努めてきた。また、牛1頭1頭にやさしく声を掛け、毛並みを整え、時には音楽をかけてやり、そうした溺愛ともいえる環境で育てられた牛たちは、人なつっこく、とても穏やかな表情だという。こうした農家や町を上げた研究や努力が、牛の健康状態を保ち、食欲を促進させ、上質な肉の成功を生んだ。その結果、1978(昭和53)年、東京食肉市場において遂に肉質日本一の販売記録を樹立した。1985（昭和60)年以降、東京食肉市場では常に上物率(極上、上のランクになった割合）は9割以上を保ち、「前沢牛」の名を不動のものにした。

こうして、地元の人は、前沢の「三つの日本一」を自慢する。それは、全国的に有名になった肉質日本一の「前沢牛」、肥沃な北上川の沖積平野で育てたおいしい米「ひとめぼれ」、そして日本に、いや世界に一つしかないという「牛の博物館」である。このほかにも、毎年6月第一日曜日には恒例の「前沢牛まつり」も開催され、毎年約3万人もの人々でにぎわう。これは、青空の下で前沢牛の焼肉を楽しむお祭りで、特設ステージでは牛の鳴きまねコンテストや前沢牛の表彰など、いかにも牛の町らしいユニークな催し物が見られる。

### 2―2．鉄山と南部牛

「牛の博物館」の紹介に入る前に、闘牛牛としても知られる岩手の赤牛南部牛についてその強さの秘密を見てみよう。南部牛は、「南部牛追い唄」として民謡にも登場するくらい、その存在が広く知られている。南部牛追い唄は、南部藩時代に、和賀郡沢内村から盛岡や黒沢尻（現北上市）にある藩の米蔵まで米を牛の背で運んだ牛方たちが唄っていたものである。東北地方は、古来、馬の産地として知られてきたが、旧南部藩地方（岩手県の中北部、秋田県の西部、青森県の東南部）に限り、古くから牛が盛んに飼われていた。この牛は南部牛と称され、背線、肢蹄がきわめて強く、頭頸部がよく発達し、山野の駄載用として特に優れ、藩政時代の山岳地帯における重要な輸送機関とされていた。

岩手県が南部牛の本場となったのは、山が険しく、馬よりも牛の方が岩石の露出する悪路に対する順応性が高いうえに、疲れにくい

ということもあり、荷駄運搬用として欠かせないものであったことによる。盛岡地方で消費される塩や魚介類を沿岸地方から険しい山道を越えて運搬し、帰路には米穀類や衣料品、日用品を搬入した。特に短角牛が重要視されるようになったのは、寛政元(1789)年に鉄山が開発され、ここで生産された粗鋼が、南部牛によって輸送されるようになってからである。当時は、牛60－70頭を連ねて一群とし、片道3泊4日の行程であった。鉄山経営者は、輸送の確保のために、地域の農民に対し牛資金を貸与して、牛の飼養を奨励した。また、江戸時代から明治中期までの牛方には、いわゆる塩の道を道中とする牛方と、房総や越後に牛を移送する牛方とがあった。牛の移送は、山形県まで15日間、新潟県まで20日間、千葉県の房総方面になると30日も要する行程であったという。

### 2－3．牛の博物館

さて、本題の「牛の博物館」について紹介してみたい。「牛の博物館」は、旧前沢町役場の南方およそ2.5キロに位置し、平泉・中尊寺にも近く、東北縦貫道平泉・前沢ICや国道4号線など交通の便もよい。1995（平成7)年4月に開館し、昨年10周年を迎えた。当初、博物館建設のきっかけは、高級牛肉として全国に知られるようになった郷土の特産「前沢牛」を顕彰する「和牛館」あるいは郷土資料館的な施設の建設であったが、郷土資料館の類はどの町にもあり、農耕の道具を並べてみても代わり映えがしないので、前沢独自の特徴のある資料館とは何かということから、前沢牛が浮かび上がってきたという。

そこで「和牛博物館」という構想が動き出し、町議会議員たちによる横浜・根岸の「馬の博物館」の研修視察後、全国どこにも「牛の博物館」はないということがわかった。「牛

写真：牛の博物館入り口

の博物館」は自治省の「地域づくり推進事業」を導入し、1992（平成4)年度から3ヵ年計画で進められ、総事業費は約10億円で建設された。建物は博物館棟とレストランの2棟で、瓦屋根の日本的な建築様式を取り入れた外観となっている。鉄筋コンクリート造り2階建てで、乗用車50台と大型バス7台を収容の駐車場と2万平方メートルの芝生広場も併設されている。中心となる博物館棟の1階の総床面積は約550平方メートルで、郷土と前沢牛専用の展示室となっているほか、図書資料室、事務室が配置されている。2階は総床面積870平方メートルで、メインの展示室と収蔵庫に加え、眺望ラウンジも設けられている。

開館当初600点余りと少なかった展示資料はこの10年間で2倍以上に増え、また最近、熱心な牛の玩具などのコレクターから膨大な寄贈があり、収蔵資料は1万点を越すまでになったという。さらに、その活動は、東南アジア・中国などへの海外学術調査の参加やインドネシアの少数民族トラジャの人々との文化交流を推進してきた。特にトラジャの民家トンコナンの修復保存も手がけて成果を残したことは、前沢町の人々の国際感覚を高める結果につながったともいわれている。こうして、現在まで、企画展・ミニ企画展40回、機関誌24号、広報紙（モコ通信）37号などを発行、講演会、体験教室などの教育普及活動などを重ね、「小さな町の大きな博物館」として活発な活動を展開している。そのほか、本来の活動に加え、牛文化の発信基地、老人ホームの移動博物館、子供とお母さんのための企画展、学会の開催・国際会議への協力、十五夜コンサート（施設と交流の場を提供)、そして日本一の前沢牛が食べられるレストラン併設など、極めて特色ある活動を進めてきた。

「牛の博物館」の開館以来の過去10年間の活動は以下の3つに集約される。1）前沢牛の地位確立と牛肉の普及拡大、2）農家や畜産に関わる人々が気軽に利用できる博物館の大衆化、3)トラジャ民族(インドネシア)の海外文化財の保存や教育費の資金援助など世界に視野を広げた市民活動の展開、である。また、博物館の機能としては、1）牛と人とのかかわりを紹介する博物館、2）前沢牛のアピールと功績を顕彰する記念館、3）前沢町の自然と町内の農具、民具などを展示する郷土資料館、4）町内の物産販売、情報を発信する観光施設、等となっている。さらに、博物館の活動としては、1）資料の収集と保管、2）調査と研究、3）展示、4）教育普及活動の4本柱となっている。

### 2ー4．展示内容

展示室の最初のパネルやホームページに「人間が野生の牛を家畜化したのは約8千年前で、以来、牛と人間はともに暮らし、歴史を築いてきた。牛は人間に食糧、労働、衣料、肥料それに娯楽など、かずかずの役立つものを与え、大きな富をもたらしたが、この身近な家畜であるウシについてもあまりにも知らないことが多い」と記され、そうした知られていない牛の世界について生物学と人文科学の両面から紹介し、人間の古くからの友達「牛」について楽しみながら学んでもらおうというのが、この「牛の博物館」の趣旨である。展示に関しては、大きく分けて、生物学的な分野と、牛と人との長い共存の歴史をテーマにした民俗学の分野、そして前沢牛と郷土の分野に分かれる。

生物学的な分野では、①牛の進化、②現生の野生牛、③家畜化のはじまり、④世界の家畜牛、⑤日本の牛起源、⑥牛のからだ等のテーマでコーナーが設けられ、生物としての牛がよく理解できるような展示の工夫がされている。日本には、天然記念物の見島牛(山口県)と、野生状態で繁殖している口之島牛（鹿児島県）がいる。その見島牛の全身骨格と口之

島牛の剥製も展示されている。

牛の胃を丸ごと標本した展示もある。岩手牧場から提供されたジャージー種を岩手大学で解剖して、牛の胃を丸ごと標本につくりあげた。反芻動物である牛には四つの胃があり、第一胃から第四胃までの内容物をそのまま凍結乾燥させて標本にし、胃の消化の段階がよくわかる内容になっている。また、かつて岩手県の在来種であった南部牛とされる写真も展示されている。

民俗学的な分野では、日本や世界の犂の展示に始まって、水牛信仰の民トラジャやアフリカの牧畜民ボディー族の牛との暮らし等々、豊富な写真やパネルで紹介している。また、在来種であった南部牛や南部の牛方、牛の道、塩を運ぶ牛、牛の祭や郷土玩具、さらには牛にまつわる世界の工芸品や牛の切手、牛のお金など、牛に関係するありとあらゆる収集品が展示紹介されている。牛の祭りの紹介では、鹿児島県串木野市の深田神社に古くから伝わる、五穀豊穣を願う春の祭典「ガウンガウン祭り」の牛面なども展示されていた。また、鎌倉時代に描かれた当時の銘柄牛を紹介する全長5.7メートルにおよぶ絵巻物「国牛十図」の複製も展示されている。

さらに、AVコーナーも設けられており、60インチの大画面1台と検索用画面2台が設置され、前者では「ぐるっと世界一周―牛と人間の絆を求めて」と題した15分ものを映写し、後者では「牛の百科」と銘打った動画52画面と静止画500枚が用意されている。さらにクイズ形式によるQ&A、「牛博士に挑戦」というコラムも準備され、正解者には博士号の称号を用意するといったユニークな趣向が凝らされている。

前沢牛と郷土の分野では、①前沢牛のあゆみ、②前沢牛の血統、③米と前沢牛、④前沢牛の流通、⑤日本一の牛飼い達などについて、豊富な写真とパネルによって詳しく展示されているほか、前沢牛の複製や、枝肉の農林水産大臣賞を二度受賞している町民の牛舎の模型も展示されている。

このように、この博物館は、牛という家畜を生物学の面からだけでなく、文化的な面、生活の中での人とのかかわりということを幅広くとらえられるように工夫されていて、牛への理解が深まる。また、開館から今日まで15回の企画展と開館10周年を記念した特別企画展も開催されている。企画展の中には、「トラジャ」、「切手にみる世界の牛たち」、「和牛」、「アジアの家畜たち―失われゆく遺伝資源―」、「クローン―性と生命を考える」、「ミャンマ―奥地の人と家畜」、「浮世絵にみるウシ」、「ザ、前沢牛―歩みとそれをつくった名種雄牛たち」といった興味深い企画が数多く開催されている。

### 2―5. 闘牛と牛の博物館

最後に、牛の博物館を闘牛という視点で見た際の感想を添えて、訪問記を結びたい。牛の博物館は日本に一つ、世界に一つと豪語するだけあって、まさに「小さな町の大きな博物館」といえる質量ともに充実したものだった。少なくとも牛のことについて「見える百科全書」とでも形容できそうな出来ばえだと言える。とくに、口之島の牛の剥製や牛の胃の標本、さらには牛が描かれた世界の切手やお金から浮世絵に至るまで、その情報と物の収集力には大いに感心させられた。しかし、我々が関心を持って調査研究に取り組んでいる闘牛に関して言えば、わずかにAVコーナーで徳之島の闘牛の短い映像が紹介されているぐらいで、ほとんど展示物や情報がないといってもいい。

日本だけでも八重山や沖縄、徳之島、宇和島、隠岐、新潟、岩手、八丈島、そしてさらに外国に目を向ければ、韓国や中国、東南アジアなど東アジア一帯で闘牛に関係する地域が数多く存在するという事実がある。これまで、外国の闘牛に関しては、スペインの闘牛

以外はほとんど知られてこなかったが、東南アジアでは闘牛士に関する小説が書かれ、それがさらに映画化されたり、韓国では闘牛大会が数万人の観客を集めたりするなど、日本ではあまり知られていない闘牛に関する実態が存在する。そうした闘牛に関するあらゆる情報を一ヵ所に集めた情報拠点・発信的な場が求められるだろう。

闘牛に関する情報は、当然、闘牛の最も盛んな地域にあることが望まれる。そうした意味では、「闘牛の島」として全国に知られる徳之島に「闘牛博物館」なるものがあれば理想的だ。現に、ごく最近、個人で博物館を開設したと聞く。願わくは、この「牛の博物館」のような情報集約的な「闘牛博物館」に発展していけば、闘牛に関心のある人は我々のように、情報を求めて現地へ足を運ぶことになるだろう。「牛の博物館」が内外で唯一であるように、「闘牛博物館」も世界に一つしかないものであるかもしれない。博物館の開設や維持は大変なお金と努力を要する一大事業だろう。しかし、地域の闘牛への強い思いが一つになれば、実現も不可能ではないことを、旧前沢町の「小さな町の大きな博物館」が教えてくれたといえる。

## 3. ウェブ上における闘牛情報の現状と課題

### 3―1. ウェブサイトの分類

次に、インターネット空間に眼を転じて、そこでの「闘牛をめぐる情報発信の現状」を見てみることにしたい。徳之島をはじめとして日本の各地で行なわれている闘牛に関するウェブサイト（以下、闘牛サイト）は、発信者の性格等によって分類すると、①闘牛大会の主催者による公式サイト、②愛好家(団体)によるサイト、③大会の映像を販売するビデオショップのサイト、④市町村の公式サイト内のサブページ、⑤地域の観光案内サイトやマスメディアのサイトのサブページ、⑥個人のサイト・ブログでの言及、⑦その他、に大別できよう。

とはいっても、概数を把握することがむずかしい⑥・⑦を除けば、母集団の数そのものはさほど多いものではなく、現在、筆者が把握しているサイト数からWeb上に開設されている闘牛サイトの概数を推定すれば、20前後から多くて30といったところであろう。ここでは、①・②・④を中心に、闘牛に直接関与していないという部外者の「外の眼」から、その現状の特徴をとらえてみたい。

### 3―2. 日本の闘牛関連サイト

まず、徳之島の闘牛について、Web上で情報を得ようとする場合、最初に検索にかかるのが「徳之島メビウスクラブ（以下、メビウスクラブ）」の闘牛ページである(http://www.tokunoshima.info/Bullfight/bull_indexn.html)。メビウスクラブのページ全体としては、闘牛に特化したものではなく、徳之島の地域ニュースや観光ガイドやイベント情報などとともに、闘牛が一項目として挙げられている形である。しかし、内容的にはひじょうに充実しており、1999（平成11)年以降の大会結果や闘牛の解説、紹介など（一部会員専用の情報を含む）徳之島の闘牛に関して、最新の情報を詳細に紹介している。闘牛に特化したサイトとしては「島と人と牛と」(http://www4.synapse.ne.jp/nakusami/)がある。徳之島の「闘牛文化」の説明や「歴代王者」や「闘牛名鑑」のデータベースなど歴史的情報の蓄積が厚い。ただし、大会日程の更新が2004（平成16)年以降滞っているのが残念なところである。メビウスクラブのページと併せて見るとちょうどよく、リンクをみても互いに協力関係にあるのがうかがえる。

他方、徳之島内の各町の公式サイトや観光協会のサイトには、簡単な闘牛の解説のみが記され、中には、先の2つの闘牛サイトへリンクを貼っているものもある。ここから、徳之島における闘牛文化が、民間主導の娯楽と

して定着していることを窺うこともできるが、「外の眼」から見れば、これらの公共的なサイトが島外から情報を得たいと思う人々の最初のアクセス先、つまり玄関口（ポータル）のひとつとなることを考えた場合、更なる充実が望まれる。

次にわれわれが共同研究を行なっている全国的な「闘牛ネットワーク」の視点から、各地の闘牛サイトを見てみることにしよう。まず、①や②のサイトに共通する特徴として見えてくるのが、徳之島や沖縄、宇和島、隠岐、新潟など各地の闘牛サイトが相互にリンクを張っているという点である。ただし、必ずしも互いに網羅的にリンクが貼られているわけではないところからすると、あくまでも個別的な関係にもとづく「横の繋がり」であるようだ。このような状況は、現実にこれらの各地域の間を「人・牛・情報」が行きかっているという「闘牛ネットワーク」のウェブ版としてとらえることができる。現実の「人・牛・情報」の地域間交流は、ここ20―30年のあいだに徐々に交流の網の目が密になってきているが、それでも、今後さらに緊密な交流が展開されていく可能性を秘めた、展開途上の段階にあると言いうる。闘牛サイトについても同様のことが言え、現在の状況から言えることは、徳之島以外のどういうところで闘牛が行なわれているのかを「外の眼」から見ようとすれば、かなり時間をかけてネットサーフィンをしない限りなかなか全体像が見えてこないという難点がある。

その点、早い段階から闘牛の観光化を意識した展開を見せている宇和島では、闘牛大会を主催する宇和島市観光協会が「闘牛. com」（http://www.tougyu.com/)というサイトを立ち上げて積極的に情報発信を行なっており、全国の闘牛に関しても「全国闘牛マップ」のページで情報提供を行なって、問い合わせ先として各自治体や観光協会の情報を掲載している(http://www.tougyu.com/tougyu/japan_map/index.html)。ただ、残念なのが、他の闘牛サイトへのリンクを持たない点である。また、隠岐の西郷町の提唱で1998（平成10)年に発足した「全国闘牛サミット協議会」は、独自のサイトを2000（平成12)年に立ち上げ、現在は隠岐の島町役場企画課に事務局を設置してサイトを運営している（http://fish.miracle.ne.jp/mou-mou/)。こちらも、全国の闘牛情報を発信し、各自治体の公式サイトへのリンクは貼られているが、リンクページそのものは「工事中」となっており、各地の充実した内容を持つ②のようなサイトへは飛べない点、サイトの更新に関して新しい情報がなかなか掲載されないという点（具体的には2006年5月段階で、同年9月に長岡市で開催予定の第9回全国闘牛サミットの情報が掲載されていない）を問題として指摘しうる。

### 3―3．韓国の闘牛関連サイト

最後に、韓国の闘牛サイト事情を紹介しておこう。韓国の闘牛といえば、毎年韓国の全国大会を開催している慶尚北道の清道（チョンド）郡と徳之島のあいだで1999年以降交流が始まり、清道郡の闘牛大会で日韓戦が行なわれたり、徳之島へも親善大使や全国闘牛サミット(2002年の第5回と2005年の第8回）へ来賓が訪問したりするなど、ここ数年「国際的」な闘牛の交流が展開されてきている。

ただし、韓国の闘牛に関してWeb上で調べようとしても、現状ではニュースサイト以上のレベルで日本語による情報収集は困難な状況にある(Googleのキャッシュによれば、2005年12月16日時点では先述の宇和島観光協会の「闘牛. com」で世界の闘牛に関する紹介ページがあり、韓国の闘牛に関しても概略を紹介していたが、2006年5月現在ではそのページが消去されている)。소싸움(ソサウム：闘牛)、청도(チョンド：清道）な

どのハングル文字による検索をかけないかぎり、韓国の闘牛サイトにはたどり着くことは困難である。

例えば、清道郡庁の公式サイトの闘牛ページ（http://bullfighting.cheongdo.go.kr）は非常に充実しており、英語と日本語のページも併せ持っている（日本語ページ：http://japan.cheongdo.go.kr/events/?Location=Event&mode=bull_origin)。しかし、現実レベルでの交流は始まっているにもかかわらず、この日本語ページへリンクを貼っている日本国内の闘牛サイトは管見の限りでは確認していない。また、清道以外にも慶尚南道の晋州（チンジュ）市や全羅北道の井邑（チョンウップ）市などでも闘牛大会が開催されている。これらの韓国の開催地に関する闘牛サイトの中でも、「晋州闘牛サイバーテーマパーク」(http://www.jinjubulls.com/)はかなり手の込んだサイトとなっている。

清道や晋州の場合に共通して見られる特徴は、闘牛による地域振興を意識的に展開している点であり、1万人以上を収容する大規模な闘牛場の整備や、闘牛のキャラクター化による経済的展開などが図られている。とくに晋州では、そのような闘牛の観光資源化をとおして、農村地域開発と畜産発展促進、伝統的な闘牛文化の活性化がはかられるとともに、闘牛場を複合的な娯楽・余暇施設として市民に提供する事業が行なわれようとしている。

日本の闘牛関係者や、闘牛に関心を寄せる「外の眼」をもつ一般観衆が、以上のような韓国の闘牛サイトに（言語の壁を何らかの形でクリアするという条件も含めて）より簡単にアクセスできる状況が整えば、この数年で急速に盛り上がっている韓国闘牛の影響が日本の各地の闘牛に刺激を与える日も近いだろう。

ただし、そこで注意されねばならないのは、そもそも闘牛は、それを愛する地域の人びとが娯楽、「ナクサミ」としてきたという庶民的な関心から起こってきたという事実である。闘牛文化の活性化のためにも、闘牛を積極的に観光化し、地域振興策の文化的資源としてとらえる商業的・行政的視点が必要となるだろうが、それはあくまで、主体的に楽しさを共有しようとする庶民の視点をベースとしたものでなくてはならない。日本各地の闘牛サイトについても、②の愛好家個人や団体によるサイトが緩やかではあるが中身の濃い情報ネットワークを構築している現状をふまえ、行政的・商業的に上手にサポートしながら、韓国や中国といった東アジアのネットワーク構築へと広げられていくことが今後の課題として挙げられるだろう。

## 4. おわりに

一般に、IT機器と高速インターネット回線の急速な普及に伴う近年の情報革命は、従来であれば高価なインフラや機材、記録媒体という制約ゆえに大都市部の大企業や国家レベルの政府関連組織でなければ困難であった情報発信の垣根を低くし、地方組織や有志団体ひいては個人といったレベルでの効果的な情報発信を可能にしたと認識されている。小論で取り上げた事例も、基本的にはそうしたIT革命と親和的な存在であるといえよう。後半で取り上げた闘牛関連ウェブサイトはもちろん言うまでもなく、牛の博物館も、もちろん最終的には集客が必要であるから展示のコンテンツに関わる情報は多くはないが、宣伝媒体としてのウェブサイトには相当の注意が払われているだろうことが伝わってくる。

そして、このような基本的な事項を踏まえたうえで重要なことも、今回見た事例からうかがい知ることができる。まず牛の博物館からは、地方からの情報発信といえども、実際にモノが集積してある場所は現在なお相応の意味を有していることがわかる。しかも、この博物館は単に資料の収集・展示を行うだけ

でなく、研究を行うことでも情報発信を続けている。博物館という場の存在、宣伝媒体としてのウェブページと、そして別種の媒体としての研究成果の発信という各種要素を通じて、決して立地条件的には有利とは言いえない牛の博物館が、日本の、ひいては世界の、牛というチャンネルを通じたネットワーク形成のハブ機能を担う存在として立ち現れるのである。こうした「狭いが高い」施設は、今後日本の地域社会、特に非都市地域の生き残り戦略にとって、有利な存在であることは想像に難くない。

一方、ウェブ上における闘牛情報の分析からわかることは、情報はスタンドアロン、つまり同種の他の情報と無関係な状態で置かれていても価値は高くないということである。逆に言えば、情報は、同種のものが集積ないしは相互連関を持つことによって単なる「足し算」以上の価値を持ちうる。その意味では、ウェブ上における闘牛情報は、情報更新が遅いという点では言うまでもなく、さらに相互参照つまりリンクという点でも発展途上の状況にあるといえよう。無論、ウェブの頻繁な更新や他サイトの情報収集は、見かけ以上に面倒な作業であることは事実である。しかも博物館と違い、インターネット空間は全体を管理する「超越者」なきアナーキーな社会である。

しかし、ウェブサイト同士の「リンク」は、文字通りネットワーク形成の第一歩であるといえる。しかも、現実世界の場所性を問わないという性格は、従来は非都市地域のデメリットと考えられてきた不利性を一気に克服しうる可能性を秘めている。こうした情報発信と情報相互のリンクに従前以上のリソースを投入することで、大都市という従来型の「中心」を経由しない、いわば「周辺」同士の直接的なネットワーク形成を飛躍的に促進しうるだろう。そのために今、地域社会や地方自治体レベルのリーダーシップに求められているのは、どこかの真似事ではない、真のオリジナリティを追求した果てに可能となる情報発信と、一地域のレベルを超えて同種の情報を連接していく類のネットワーク形成におけるイニシアティブの発揮なのではないだろうか。

## 参考文献

千葉明『岩手のあか牛物語』岩手出版、1987
肉牛新報社編『前沢牛ものがたり』肉牛新報社、1995